シェイクスピア翻案映画としての『果てしなきスカーレット』

佐々木隆

プロローグ

シェイクスピア映画は原作に映画監督や脚本家が手を加えながらも大枠を変更せずに製作されるものや、時代設定等背景となるものの大きく変更しながらも原作の意図を生かすものや、エッセンスだけを生かし全く新しい作品として製作されるものがある。

細田守監督『果てしなきスカーレット』（二〇二五）はパンフレットの中で『ハムレット』の翻案(一)であることを明言し、むしろ「アダプテーション（翻案）するか」(二)と細田守自身が述べている。一般には細田アニメの観点から『竜とそばかすの姫』（二〇二一）以後の新しい作品であること、女優・芦田愛菜が初めて主演を務める映画として注目を浴びた。ここではシェイクスピア翻案映画としての『果てしなきスカーレット』（以降『スカーレット』と略す。なお、人物を指す場合にはカッコを外してスカーレットと表記する）について見ておきたい。

一　『ハムレット』から『スカーレット』へ：登場人物

翻案では原作のテーマが生かされているかどうかは非常に重要な点である。この点では『ハムレット』も『スカーレット』も大きなテーマとして「復讐」がある。実際には死んではいないが、スカーレットは冒頭早々で「憎き仇への復讐に失敗して、死んだ」(三)という思いを口にする。舞台設定もデンマーク、エルシノア城が描写され、アムレット、がートルード、ギルデンスターン、ローゼンクランツ、

ポローニアス、レアティーズ、コーネリウス、ヴォルティマンドと『ハムレット』の登場人物がそのまま登場する。アムレットは十二世紀に歴史家サクソ・グラマティクスによって書かれた『ハムレット』の原作とも言えるデンマークの歴史に関する『デンマーク人の事績』に登場するアムレート（Amleth）はハムレット王子のことで、この時のアムレートの父の名前はホルウェンディルであるが、このあたりだけが名前としては一致しない。しかし、細田が『ハムレット』だけではなく、『ハムレット』の原作にも目を向けていたことは抑えておきたい。

登場人物だけを見れば『スカーレット』ではオフィーリア、ホレイショーは登場しない。その代わりに看護師の聖（Hijiri）が登場する。ハムレット王子が王女のスカーレットになっていること以上に、聖をどう捉えるかがこの作品の最も鍵になると思える。設定では聖は看護師という設定である。聖がオフィーリアとホレイショーの役割を果たすのかどうかは、ここでは「否」としておきたい。なぜなら、短い時間の中でスカーレットと聖は生死を共有したことで精神的にかなり近い関係にはなったものの恋人同士にはなっていない。また、ホレイショーはハムレットに寄り添いながらも実際に外部の存在である。聖も異世界からの人物であること、死者の国ではスカーレットと共に行動しているが、スカーレットが闘いに身を投じているのに対して、聖は死者を出さないように常に行動している。

二　翻案のポイントはどこか

筆者は『果たしなきスカーレット』を見終わった時、シェイクスピア翻案映画として捉えた場合にポイントになるのは次の五点ではないかと考えた。

一　「復讐」がテーマとなっていること。この点は共通している。この背後に「許し」がキーワードになっていること。

二　ハムレット王子がスカーレット王女となり、オフィーリアが登場しないこと。

三　聖という現代からの人間を登場させたことをどうとらえるか。ホレイショーの役割を一部担っているものの、細田が全く新しく着想した人物であること。

四　「死者の国」を設定したこと、さらにはこれが意識を失った時の異世界的な役割を果たしていること。原作には全くない設定であること。

五　スカーレットは最後には死なず、王女として国をまとめていくことで終わること。

筆者が今後考察を行いたいのは第一に「三　聖という現代からの人間を登場させたことをどうとらえるか。ホレイショーの役割を一部担っているものの、細田が全く新しく着想した人物であること」と第四の「死者の国」をどうとらえるかだ。特にこの二つの点を大きく取り上げた考察を今後も行っていきたい。

エピローグ

『スカーレット』では毒によって意識がなくなった状態が「死者の国」として描かれた世界から、意識を取り戻すことで現実に戻るという設定になっている。これはイギリスのファンタジーの先駆的な作品、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』（一八六五）、アメリカのファンタジーの先駆的な作品、フランク・バウム『オズの魔法使い』（一九〇〇）と類似の設定である。さらに、こうした夢の世界はシェイクスピア自身も『じゃじゃ馬ならし』の序で

スライが酔っ払った間に見た夢のような設定になっていることに似ている。

枠組みを作り、全体の内容が夢、あるいは眠っている間の幻想の世界として描いたことは、ファンタジーの原点ともいう手法になっているが、問題ははやり聖の存在であろうか。全く別の時代の異世界からの人物が「死者の国」に登場するというこの設定はシェイクスピアにはない手法だ。「復讐」と「竣巡」を繰り返す点は類似するものの、死なないハムレットになっている点は決定的に異なる。これは加藤泰監督『炎の城』（一九六〇）と同様だ。この作品は『ハムレット』の翻案映画であるが、ほとんど取り上げられることはない。まとまって論じたのはおそらく筆者が最初であっただろう(四)。

『果てしなきスカーレット』は細田の思いがかなり反映された新時代のシェイクスピア翻案映画の一つとして捉えてもよいだろう。しかし、その評価を今下すことは控えておきたい。今回は整理することにとどめておきたい。

注

（一）細田守「1万字インタビュー　原作・脚本・監督細田守　争いの絶えない今の世界だからこそ、「復讐」をテーマにしようと思いました」（プログラム『果てしなきスカーレット』東宝株式会社ライツ事業部、二〇二五年十一月）、頁表記なし。

（二）同書。

（三）細田守『果てしなきスカーレット』（新潮社、二〇二五年七月）、十二頁。映画の原作小説となっているため、台詞等はこの原作小説より引用する。

（四）「日本におけるシェイクスピア映画研究

に関する一考察―『炎の城』を巡って」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第八輯、武蔵野学院大学、二〇一五年三月）、「シェイクスピア映画としての『炎の城』に関する研究―『ハムレット』とのストーリー展開の比較―」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第九輯、武蔵野学院大学、二〇一六年三月）、「『炎の城』における劇中劇に関する研究」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第十一輯、武蔵野学院大学、二〇一八年三月）。

※本稿は二〇二六年五月四日に一旦脱稿した。今後、海外上映もあるため、その後の反映なども参考にしながら、再度取り上げたい。

児童文学者渡辺茂男が國學院系列校の出身であること

新藤　透

一、渡辺茂男について

児童文学者として『エルマーのぼうけん』を翻訳し、さらに図書館人として子どもたちへの読書普及に努めた渡辺茂男という人がいる。一般社会に渡辺がどの程度著名なのか筆者は把握していないが、少なくとも児童文学に関心がある者、あるいは図書館関係者にはかなり名が知れ渡っている人物である。渡辺は**Japan knowledge**に収録されている「日本近代文学大事典」にも立項されており、二〇二五年に宮川健郎によって加筆されている。その全文を次に引いてみる（アラビア数字は漢数字に改めた）(二)。

渡辺　茂男

わたなべ　しげお

昭和三・三・二〇～平成一八・一一・一八

一九二八～二〇〇六

翻訳家、児童文学研究者、児童文学作家。

静岡市の生れ。一九四九（昭和二四）年、静岡に設置されていたＧＨＱ直属のＣＩＥ（民間情報教育局）図書館の館長の英会話クラスに参加し、翌年、静岡県教育委員会の嘱託として同図書館のスタッフになったことが、渡辺茂男の児童文学者としての原点になる。図書館の児童室には一〇〇冊ほどのアメリカの絵本があり、日本語に訳して、小中学生に読んでやった。一九五一（昭和二六）年、同図書館の推薦で、慶應義塾大学に開設された日本図書館学校（のちの文学部図書館情報学科）の一期生となる。卒業後、フルブライト奨学金を得て渡米し、大学院で図書館学を学ぶ。その後、ニューヨーク公